

パタゴニアおよびケープ地方を旅して

大賀 二郎*

はじめに

1992年12月～1993年1月にかけて、アルゼンチン共和国パタゴニア地方を旅した。バルデス半島、フェゴ島、モレノ氷河付近のトレッキングおよびビーグル水道のクルージングを行った。また、1993年7月に南アフリカ共和国ケープ地方を旅した。ケープタウン市郊外、テーブルマウンテン、喜望峰周辺のトレッキングおよびシールズアイランドのクルージングを行った。

南アメリカおよびアフリカ両大陸南端部は、それぞれ異質の大陸の特性をもちながら、地の果てに位置する。遙かな移動の末、地の果てにたどり着いた民族が、そこで独自の文化を築いたように、動植物についても南進の旅を続けてきてそこに定着したものがあに違いない。もうこの先はない。厳しい自然環境であっても、この地に定着するより選択は残されていない。

両大陸の南限において、動植物はどのように適応し、また進化や分化が行われたのであろう。両大陸南端部の環境条件や生物相を比較することも興味がある。ちなみに植物区系によれば、世界6区系系のうち、パタゴニアは南極区に、ケープ地方はケープ区に位置づけられている。なお動物地理区においては、前者は新熱帯区に、後

者はエチオピア区に属している。

小稿では以上のような問題意識をもちながらも、現実には時間的にも能力的にも掘り下げることができず、旅の目に映じたままの断片的な記述にとどまった。

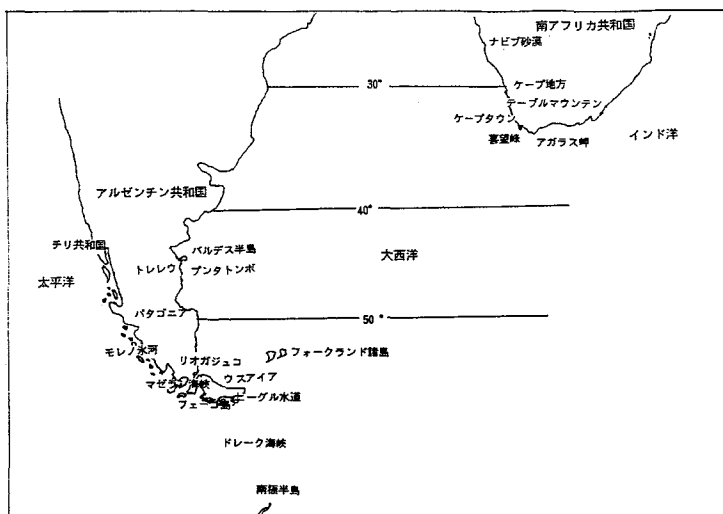
両大陸南端部の環境条件

両大陸南限は、南緯度でパタゴニアフェゴ島で55°、ケープ半島で32°である。

パタゴニアは、ドレーク海峡をはさんで南極大陸と向き合う。強風が吹きつける厳しい寒冷帯である。延々8,000kmのアンデス山脈は、突端ホーン岬で海に消える。無数の島々、湖沼、氷河が入り乱れ、複雑な地形が形成されている。ここには南極大陸まであと1,000kmの地上最南端の街ウスアイアがある。

パタゴニアの北東部はアンデス山脈にさえぎられて、パンパスと呼ぶ乾燥地帯がある。バルデス半島には、マゼランペンギンや海生哺乳類の群生地がある。

一方、喜望峰を初めとするケープ地方は、ナミブ砂漠が北に控えているが、カール台地がこれを遮っているため通年陽光の輝く温暖な気候である。海岸は、テーブルマウンテンの巨大な岩峰が、大陸の最後の城壁となって



パタゴニアおよびケープ地方概念地図 注 南アフリカとアフリカ両大陸の間の距離は縮少してあります。

* 神戸国際交流協会国際部参事

海に迫る。

ここに位置するケープタウンは、スエズ運河のない頃のいわゆる大航海時代、東西を結ぶ航路として栄えた。それだけに16世紀以降の文化交流のひとつの基地で、ここを原産地とする園芸植物が多数見られる。

両大陸は大洋によって互いに隔絶された位置にある。気候はパタゴニアはおおむね寒帯気候、ケープ地方は地中海性気候である。

植生では、前者が亜寒帯草原、亜寒帯針葉樹林および山地氷雪地帯が複雑に入り組んでいるのに対し、後者は温帯灌木草原と農牧地が殆どである。両者の環境条件は対照的である。

もともと大陸移動説によれば、三畳紀（2億～2億2千万年前）、すべての大陸が合体していた時代には南アメリカ東部とアフリカ西部はほぼ隣接していて、南アメリカパタゴニアとアフリカケープ半島は相接する地点にあった。白亜紀（8千～1億2千万年前）になると、当時 Gondwana 古大陸の一部をなしていた南アメリカ、オーストラリア、インドは互いに分裂を始めた。南アメリカとアフリカの離反も次第に大きくなり、後期には大西洋によって完全に隔てられた。

南アメリカとアフリカの両南端部は、恐竜化石の産出地として著名である。ケープタウンには南アフリカ博物館があって、三畳紀からジュラ紀初期にかけての恐竜化石アンキサウルス、メラノロサウルスなどが収蔵されている。一方、パタゴニアのトレレウには前世紀博物館があって、同類のコロテディア、ムスサウルスなどが展示されている。いずれも古竜脚類であり、かつては相接する地域であったことを物語っている。しかし、現生種については、両大陸は全く異なった生物相によって占められる。環境条件が対照的であるが、地史的な過程を経た残存種も存在しないようである。

パタゴニアの生物

パタゴニアは南緯32°のバルデス半島から前述の55°のフェゴ島に至る広大な地域を占める。ツアーは北部のバルデス半島から南下した。同半島は大部分がパンパスで、部分的に貧弱な灌木帯になっている。この地方を移動中にダーウィンレア（ダチョウの一種）、グアナコ（ラクダ科）、パンパスジカおよびフクロウ（種不明）が観察された。このあたりは広大な個人所有地が多く、有刺鉄線の張られた区域があるが利用されていない。ほとんどが無人地帯である。

ボルドサンホセは海鳥の小島である。観察は対岸から行うが、無数の黒点として見える。固定双眼鏡で見ると、島を埋めつくした海鳥が忙しく動き廻っていた。鳴声はここまで聞こえてこないが、現場にはとてもおれな

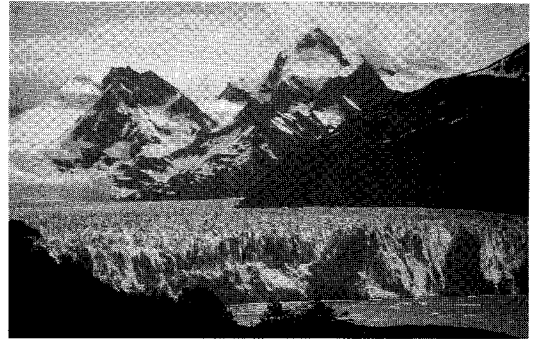


写真1 アンデス山脈の終わりに位置するモレノ氷河

騒々しさであろう。

カレタバルデスはゾウアザラシの群生地である。崖地を斜めに降りると、砂浜にごろりと横になっている。眠っているようだが、薄目を開けて注意を怠っていない。ガイドの説明では大きなのが雄で、他の数頭は雌。ハレムを作っているのだという。一定の安全距離があって、これを越えると、突然、頭をもたげ、大声で威嚇する。

ブント・ガルダーラはアシカの群生地。断崖絶壁の下の岩場にある。降りることはできない。アシカはかつては毛皮として大量に捕獲された時代があった。それから何世代にもなり、恐ろしい目にあった個体はいないはずだが、今でも人間を恐れるという。

ブエルト・ピラミダスはかつては捕鯨の基地として有名であったが、今はゴーストタウンとなった。見晴らし台の横には鯨の背骨が転がっている。背の高い雑草が廢家を取り囲んでいた。しかし紺碧の海の景勝地で、最近ではホテルウォッチングの基地として売り出そうとしている。

ブントトンボは海洋リゾートの町トレレウの郊外にある。マゼランペンギンの世界最大の群生地である。体長80cm程の中型種で、その数10万羽ともいわれている。このあたりパンパスの草原が海に迫る台地である。巣は海岸の灌木の根元に通常横穴を掘って、産卵育児が行われる。

誰でもペンギンコロニーに立ち入ることが出来るが、ルールがある。ペンギンの巣穴と海との間に彼らの特定の通路がある。ペンギンが歩いているときは、人間は待たなければならない。ペンギン優先である。ペンギンは人間を恐れない。頭に触れることも可能であるが、これは厳禁。嘴はペンチのように鋭く、指を切り落とすぐらいのことはできる。それに人間の臭いが付くと、仲間から疎外されるという。いつの間にか車のボディの下に、ペンギンがもぐり込んでいた。人なつこいが、触れることができなかった。

ペンギンたちは夏期はここで過ごし、他の時期はビー

グル水道に移動する。

いよいよバルデス半島から、最南端の街ウスアイアに向かう。まずバスでパンパスの大草原を走り、リオガジュコへ。ここからアルゼンチン航空で1時間。欠航や延着が常識と言われるが、私たちはラッキーだった。早朝、ウスアイア空港に着く。市街の一角に敷設された仮設空港のようであった。

真夏でも街の背後には氷河が迫っている。ここでは上天気といわれていたが、雲は低く流れている。時としてたたきつける烈風。ビーグル水道のクルージングは行われた。しかしいつ天気が急変するかわからないので、トランクをホテルに置くなり直ちに乗船。アシカや海鳥の群生するロス・ロボス島に向かう。海峡から見る光景は素晴らしかった。氷河をいただく山脈が海峡両側に並ぶ。中央部に船が進むと猛烈な波、上から滝のように落ちてくる。とても甲板に出られない。ロス・ロボス島は島というより岩礁であった。オタリア（アシカ科）やマゼランガン（現地でカイケンという。）の群生がおびただしい黒点のように見える。岩礁によって住み分けが行われている。

ウスアイアは荒涼としたフェゴ島にある。かつては流刑地であった。近年、アルゼンチン政府の方針もあって、こんなところに人が移住するようになった。小屋もモダンな住宅に変わりつつある。街の真ん中に一本のショッピングストリートが走る。ブティック、ファッション、家具などの店もある。

ここに『地の果て博物館』がある。意外とモダンで銀行の建物と言ってもおかしくない。展示物は、アラウカルフ族やヤガン族など先住民族の毛皮、狩猟用具などの民俗資料。それにフェゴ島周辺の鳥類の剥製で占められている。

街は夏の3カ月だけ、自然も人も生を謳歌する。

フェゴ島はほとんどが寒地性の原生林で、その中に渓谷、湖沼、湿原、原野などがある。中央には氷河をいただく山岳がそそり立っている。

原生林は3月頃になると紅葉するという。樹種はナンキョクブナ（ミナミブナともいう）が多い。霧の流れる梢には、現地名ミゾデンドロン（属名 *Viscum* とみられる）と呼ぶ外形ヤドリギに似た黄金色の寄生植物がみられた。白い目立たない無数の花をつけていた。非常にもろく、節から枝が落ちやすい。サルオガセ、ハナゴケの類も樹林中ではごく普通であった。林内の傾斜地にはタマシダを小型にしたようなシダの群落が各所でみられた。

湿原にはコモウセンゴケの類の群落があった。我国のものより幾分小型であるが、色彩、形状の相違はあまりない。モウセンゴケの類は、日本、南アフリカ、オース

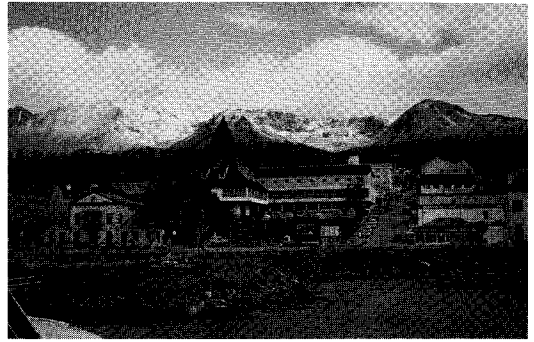


写真2 地上最南端の街ウスアイア

トラリア東部などでも普通に見られるが、なぜかその分布域は世界各地に及んでいる。

林内の川にはビーバーダムがあった。付近に製材所のように木のかじりかすが散らばっていた。

ここにはカラファテと呼ぶメギ科の小灌木があって、ヤマブドウ状の実をつけていた。甘酸っぱい味がする。この実を材料にしたジャムが売られている。キツリアと呼ぶ食料キノコは原住民の嗜好品になっているが、その時期ではなかった。

フェゴ島の帰路、ペリト・モレノ氷河を訪れた。アンデス山脈が海に迫るあたりはたくさんの氷河があるが、最大のものがモレノ氷河である。氷河見学にはカラファテが基地となる。アルヘンチーノ湖畔にあり、遠くにチリ側のフィッツロイの奇峰がかすかに望見できる。

早朝、湖畔を散策した。広大な湿原があり、野鳥の天国であった。ところどころに植物群落があり、ほとんどが半球状の塊で、キク科のものが多かった。寒気や強風に適応したものであろう。

カラファテから岩山と草原を車で3時間あまりで、モレノ氷河につらなる湖に着く。紺碧の湖面に流氷のオブジェ。岩場の道を氷河に向かう途中、真っ赤なアッケシソウの類やカキランを大きくしたようなラン科植物。それに氷河の前面の絶壁にはエンボスリウム（ヤマモガシ科）の紅の花が鮮やかであった。

突然、氷河の末端が眼前に現れる。前面の湖に向かって荘厳な水壁がつらなる。幅5km、高さ70m。世界でただひとつ、現在でも成長しつつある生きている氷河といわれる。4、5分おきに氷塊が雷鳴のように響きながら、湖に崩れ落ちる。ビルがひとつ倒壊するのに等しい。近くまで遊歩道が設けられていて、その迫力を目前にすることができた。しかし、氷河の成長の度合いによって立入禁止の年もあるという。氷塊の破片によって、過去何回か負傷者が出たといわれる。氷河から離れた湖畔にロッジがあって、ここからヘリコプターが発着している。空中から10分間。氷河の全貌と表面のクレパスの形状を

つぶさに見ることができる。

なお、ロッジのあたりはナンキョクブナを主とする原生林で、ここでも幹や枝にミゾデンドロンやサルオガセの着生がみられた。

この頃パタゴニアは白夜で、夜の12時頃でも地平線はあかね色で、午前1時頃に初めて闇となる。

ケープ地方の生物

アフリカ最南部の港湾都市ケープタウンは、いまま格調高い街並みがあるまま息づいている。背後の巨大な岩峰テーブルマウンテンは標高1,088m、ほぼ1,000mの台地が横に広がっている。大西洋とインド洋がぶつかりあって発生した霧が、絶えず山脈にかかっている。

ケープタウンを南下すると、アフリカ最南端喜望峰に至る。しかし厳密な意味ではアガラス岬が最南端のポイントである。

南アフリカ共和国は1991年アパルトヘイト法全廃を宣言した。1994年春には人種差別撤廃後の初めての総選挙が行われる。体制の大きな変革を目前にして、いろいろな立場からの争いが激化しているとの報道がある。しかし、当国の旅行には別段の制約はなかったし、入国してみると意外と平穏であった。ただヨハネスブルグ南部では部族の衝突が多発していて、毎日死傷者が出ているという。

ケープタウン市は外観的には静かであった。日没後、街頭には人通りがなくなるが、これは昔からの慣習で治安が悪くなったからではない。ただ貴金属店、ブティック店など高価な商品を扱う店は昼間でもドアを閉じており、客の様子を見てから開く。

港湾施設は古い時代のものがまだ残っているが、煉瓦造りの倉庫などは外郭をそのままにしてレストランに転用したり、ガラス張りのドームショッピングセンターなどができて結構賑わっている。ここには名物の海鮮料理がある。カニは大きくてとても食べきれない。ケープタウンの水道はアフリカでは唯一そのまま飲める水である。港湾は神戸のハーバーランドのイメージがある。ただ湾内にはアザラシが自由に遊泳している。夜間になると緩衝材の上でごろりと横になっている。

翌早朝からテーブルマウンテンに向かう。前日の雨も上がってロープウェーが動くという。だが風が出るといつでも運行中止になる。古城のような駅から急カーブのスロープ。途中は霧に閉ざされている。壮大な岸壁が迫ってくる。多肉植物が付着しているのが見える。10分あまりで山頂駅に着く。ケープタウン市街と海岸線を一望のもとに見下ろせるはずだが、絶えずガスが流れて視野をふさぐ。テーブルマウンテン山頂は広い台地になっているが、ほとんどが岩場で、自由に散策するわけにはいか

ない。周囲は断崖絶壁である。ロープウェーで上って、天気と気を配りながら付近を散策する。いつ運行中止になるかわからない。山頂にはアロエの大群落が燈色の見事な花を付けていた。また各種の多肉植物が礫の間にみられた。これらはキク科、ツルナ科、ユリ科などから進化したものとみられる。

テーブルマウンテンの向う側には、ライオンズヘッドの奇峰がある。その名の由来は最後のライオンがこの峰で撃たれたといわれている。

テーブルマウンテンから喜望峰までは天気の良い内に直行する。途中、アザラシを見るため、ランチ船でシールズアイランドに立ち寄る。船は出るには出たが、すさまじい波で木の葉のように揺れる。岩場に憩うアザラシの群れを見るのもそこそこにして引き返す。陸に上がったもしばらく足腰がぶらぶらしていた。

喜望峰までは海岸に沿って、風光明媚な別荘地が続く。ケープ半島に入ると、広々とした草原と低木林ステップである。一帯は喜望峰国立保護区80km²の地域である。湿原も点在する。

当地方の特産種プロテアの類も次第に目につくようになった。しかし開花時期にはまだ早い。いたるところでオランダカイウの原種が純白の花をつけていた。園芸種よりは幾分小型のように思えた。ゴクラクチョウカ、クンシラン、グラジオラス、ハマエンシス、ネリネなどは園芸植物になっている。岩場や礫地には、アロエ、マツバギク、ガステリア、エイラックなどの多肉植物が他の草木と共存していた。

ケープ半島南端部の草原は、人手が入る前に保護区に



写真3 鬼々迫るフェゴ島の林中。中央に奇生植物ミゾデンドロンが見える。

指定されたもので、入植以前のアフリカの自然がそのまま残されているという。ダチョウ、ヒビの姿が見られた。以前にはシマウマもいたという。

喜望峰は小さな岩場の岬であった。無限の大砂漠、海のような湖、赤道直下で雪を頂く高峰そして人類最古の文明を育てた野性の大陸がこの小さな岬で終わると思うと感慨無量であった。岬あたりの台地はアロエ、マツバギクなど野の花の盛りであった。

これに対し、海は厳しかった。次から次へと白波が寄せてきて、崖をはい上がろうとする。海は黒く、狂暴で、陽光の陸と対照的であった。

おわりに

パタゴニアとケープ地方は地史的に隣接していた時代があったが、現生種についてみれば残存種や系統のものは見られない。ちなみにパタゴニアは、かつては南極大陸によってニュージーランドやオーストラリアと接続していた時代があったとみられ、両地方の植物に近似の種があるといわれる。

パタゴニア北部はアンデス山脈の影響を受けた乾燥草原地帯で、山地にはサボテンやリュウゼツランがみられる。南端部のフェゴ島は広範にナンキョクブナの原生林によって占められている。いずれも植物にとって生存の厳しい空間である。特異な植物としてミゾデンドロン、カラファテ、エンボスリウムなどが分布する。

一方、ケープ地方は全く対照的な植物の集団がある。プロテア類の固有種を始め、園芸植物の原種をいたるところの山野で見ることができた。ケープ地方は有用植物の人為的な交流の発進基地になってきた。山岳、礫地などにはナミブ砂漠の地続きもあって、多肉植物の宝庫である。ユーフォルビア、アロエ、マツバギクなどの群落が異彩を放っていた。都市部にはオーストラリアから移植されたユーカリが人工林としてよく適応している。

南アメリカ大陸はパナマ地峡によって北アメリカ大陸と結ばれ、そしてベーリング海峡が氷結していた時代にはユーラシア大陸と接続していた。更にユーラシア大陸はスエズ地帯でアフリカ大陸と結ばれる。すなわちこれら大陸は一連の輪によってつながる。パタゴニアとケープ地方は諸大陸を半円に結ぶそれぞれの南限に位置する。

南アメリカとアフリカのある種は、それぞれの南限にたどり着いた。種として受け継いできた形質の上に極限の地での環境の影響を受け、そこで更に進化や分化が進んだ。

パタゴニアはどちらかといえば墨絵のような陰性の世界であり、ケープ地方は油絵のような陽性の世界である。

両地方の植物の形態は対照的なものとなった。

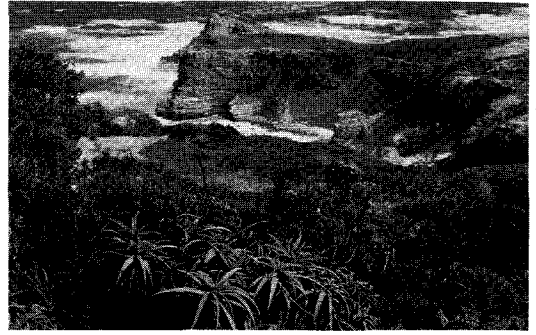


写真4 喜望峰の先端（アフリカ大陸はここに終わる）

参考文献

- Glen Mall (1987) 『Table Mountain』 出版元は著作者と同じ。
- 飯山達雄・西村 豪 (1970) 『秘境パタゴニア』 朝日新聞社
- Shrsley Nore (1979) 『Tierra del Fuego』 Rae Natalie Prosser Goddall
- Shelley Vanzyl (1993) 『Wild Flowers of South Africa』 Struk Publishers
- South African Tourism Board 『South Africa』 出版元は著作者と同じ。
- Tam Schaatena (1991) 『Cape Town』 Struk Publishers
- トニー・モウレス (1976) 『未踏の大自然アンデス』 タイムライフブックス
- Wildlife conservation and Eco-Tourism (1993) 『Wildlife Watch』 出版元は著作者と同じ。